

【講演記録】

上海の東亜同文書院とその歴史マップ

愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員 石田 卓生
(2018年7月1日、岡崎市図書館交流プラザ Libra ホール)

はじめに

この3月、上海に行った際、現代の上海に残る東亜同文書院ゆかりの地を訪ねましたので、今日は、そのことをお話します。

この講演会は愛知大学が主催しているのに、どうして、中国の上海や、東亜同文書院（以下、同文書院）などという聞き慣れない言葉が出てくるのか不思議に思われた方もお見えになると思います。まず、愛知大学と上海や東亜同文書院との関わりから始めていきましょう。

愛知大学は、1946年、ここ岡崎と同じ三河にある豊橋で開校しているのですが、その前身となる学校がありました。同文書院という中国にあった学校です。これは1901年に上海で開校しました。そして、同文書院にも前身の学校があり、日清貿易研究所というのですけれど、これも上海にありました。1890年に荒尾精（あらお・せい）という人が作った学校です。この荒尾精に中国のことを教えたり、その中国での活動を支援したりしたのが岸田吟香（きしだ・ぎんこう）という人なのですが、この人は1880年に上海で楽善堂という薬や書籍を扱うお店を出しています。このように、愛知大学の根っこをたどっていくと、140年も前の上海に行き着きます。ですから、愛知大学と上海には深いつながりがあるというのです。

ここで、上海、そして上海がある中国というのはどのような国なのか考えてみましょう。それには、文化、歴史、経済、政治などいろいろな切り口がありますが、もっとも素朴に身体感覚といいたいでしょうか、大きさ、距離感で見えていきます。



図1 日本と中国のスケール比較
(The True Size of... <https://thetruesize.com/>)

分かりやすいように地図で日本と中国を重ねてみました（図1）。こうしてみると、北海道の稚内が北京だとしたら、長崎の沖にある五島列島辺りでもまだ香港には届きません。中国の地図を見ていると、上海や南京、蘇州というのは同じ地域にあり、割合近くにあるように見えるのですが、例えば上海を東京とすると、蘇州というのは小田原辺りとなり、南京は岡崎や名古屋辺りになります。やはり、中国というのはなかなか大きいですね。

さらに身近な感覚にしてみましょう。これは上海と岡崎を並べたものです（図2）。向かって右の岡崎の地図の真ん中あたりに、今、私たちがいる Libra（岡崎市図書館交流プラザ）があります。向かって左が同じスケールの上海の地図です。

上海を回るに際して、とても役立ったのが木之内誠編著『上海歴史ガイドマップ』増補改訂版（大修館書店、2011年）という書籍です。現在の上海の地図の上に戦前の建



図 2 上海と岡崎のスケール比較 (くらべ地図 <http://kurabe-chizu.info/>)

物や歴史的な事件が起こった場所を重ねたものです。さきほど検索してみたなら、ここ Libra にも所蔵がありました。

上海で最も有名なのは、外灘あるいはバンドと呼ばれる黄浦江西岸の租界時代の旧市街でしょう (図 3)。高層ビルが立ち並ぶ新市街は黄浦江を挟んだ対岸の浦東というエリアになります。同文書院の学生たちが見たのは、もちろん旧市街の方です。観光地としても有名ですから、行かれた方もいらっしゃるかもしれませんね。このクラシックな建築物の中には日本人が建てたものもあります。例えば日清汽船株式会社のビル。この会社は、同文書院の前身である日清貿易研究所の卒業生が経営していた水運会社です。上海の学校で中国のことを勉強し、



図 3 上海外灘 (2018年3月筆者撮影)

起業して上海で立派なビルまで建てたのですから、実にはたいしたもの。この建物の玄関には「優秀歴史建築」と記されたプレートが埋め込んでありました (図 4)。これは歴史的価値があるものとして上海市に指定されたことを示すものです。日系の建築物ではほかに三井物産の上海支店も指定されています。

急速な経済発展の中で戦前の建築物はどんどん姿を消していますが、一方でこうした上海市の建築物保全の取り組みもあります。

そういったことに関して街を歩いていると面白いものを見つけました。ある工事現場を見てみると、外壁はクラシックなのに内部は新築というのがありました。東京駅前の旧東京中央郵便局の外壁を利用した KITTE と同じやり方です。ただ、こういうのは古いものを壊して新築するよりも手間が掛かるようです。この工事現場の施工プレートを見ると、2014年8月1日起工、竣工予定は2017年12月31日となっていたのですが、私が見かけたのは2018年3月13日です。2ヶ月半も工期が延びてしまってますし、しかも外壁を鉄骨で支えているだけの状態で内部は何もなく、完成まで程遠い様子でした。



図 4 旧日清貿易汽船社屋に掲示されている「優秀歴史建築」プレート (2018年3月筆者撮影)

もちろん、戦前の建築物がすべて価値を認められるわけではありません。戦前、上海にいた日本人キリスト教信者の団体上海日本人 YMCA が入っていたビルは完全な廃墟になっていました。同じ時代の建築物であっても「優秀歴史建築」に指定されるなどしないと、ただの老朽化した建物として再開発されることになるのです。こうしたことは日本でも多々あることですが、同文書院の歴史を訪ねようとする場合、時間が経てば経つほど、姿を消す建築物や街並み、通りが増えるわけですから、これからますます難しくなっていくということになります。

I 楽善堂と日清貿易研究所

さきほど少し触れましたが、愛知大学の先駆け的存在である岸田吟香の上海のお店から見ていきましょう。岸田吟香というは、豊田にあった挙母藩に出仕していたこともある人です。『麗子像』を描いた岸田劉生の父親と紹介した方が親しみがわくでしょうか。吟香が上海に行くようになったのは、ヘボン式ローマ字を考案したり、明治学院大学を作ったりしたジェームス＝カーティス＝ヘボンの和英辞典『和英語林集成』出版の手伝いをしたからです。その後、彼は1880年に上海に楽善堂という書籍や薬剤を

扱うお店を開きました。このお店があったのは、現在は観光客で賑わう地下鉄南京東路駅の近く、聖三一堂(ホーリー＝トリニティー教会堂)がある区画で、九江路と河南路が交差する南東角です。当時を偲ばせるようなものは何も残っていません。「市場監督管理」という事務所になっています(図5)。この場所にあった楽善堂に吟香を訪ね、



図 5 楽善堂現状 (2018年3月筆者撮影)

教えを請うたのが荒尾精という人です。彼は名古屋の枇杷島、尾張藩士の家に生まれましたが、明治に入って一家は上京、父親が商売を始めたものの失敗し、間もなく両親ともに亡くなり零落しました。そんな境遇でも彼は優秀で向学心が強かったのでしょう、学費なしで最新の教育を受けることができる軍人となりました。ですから、戦争をするために軍人になった人ではないのです。これからの日本は海外と貿易をして発展していかなければならないと考え、それにはまず日本のすぐ近くにある巨大な中国と貿易するための人材を育てようと、1890年に日清貿易研究所という学校を作りました。時々、これはスパイ学校だったという人がいますが、開校する時は、競馬場で100人ほどの学生が運動会のようなことを行い、上海の街の人々がたくさんに見に集まったことが当時の新聞で報道されているくらいですから、こそこそ隠れるようなものではありませんでした。これは上海の競馬場、現



図 6 上海競馬場現状 (2018年3月筆者撮影)

在の人民広場、人民公園の近くにありましたが何の痕跡もありません (図6)。

II 高昌廟桂墅里校舎

東亜同文書院は、近衛篤磨 (このえ・あつまる) 公と根津一 (ねづ・はじめ) 先生によって作られた学校です。近衛公は、戦前、総理大臣に就いていたこともある近衛文磨 (ふみまる) の父親で、大河ドラマにもなった天璋院篤姫 (てんしょういん あつひめ) とは義理の兄弟姉妹になります。近衛家というのは、藤原道長から続く家柄で、明治維新までは摂政や関白になることができた摂関家であり、明治維新後は華族の最高位である公爵家でした。

近衛公はヨーロッパに留学して英語やドイツ語をマスターし、帰国してからは学習院を整備したり、帝国議会の貴族院議長に就任したり、欧米での経験を踏まえ、アジア諸国は交流を深めなければならないと考えて東亜同文会を結成したりと多方面で活躍しました。1904年40歳という若さで亡くなられてしまいましたが、長生きされたなら総理大臣にも就いたでしょうし、指導者として活躍して日本の歴史ももっとよい方向に変わっていたかも知れないと思わせるような大人物です。

根津先生は、さきほど出てきた荒尾精の



図 7 明治時代の高昌廟桂墅里校舎



図 8 高昌廟桂墅里校舎現状 (2018年3月筆者撮影)

親友で、一緒に日清貿易研究所を運営していました。荒尾が1896年37歳で急死した後、その遺志を継いで、近衛公と共に日本人が中国のことを現地で学ぶ東亜同文書院を作りました。

この東亜同文書院についても、日清貿易研究所と同じようにスパイ学校だったに違いないという人がいるのですが、そういう話には根拠がまずありません。例えば、東亜同文書院は上海で3回校舎を移転していますが、すべて租界 (そかい) の外でした。租界というのは中国の法律が適用されない地域です。そこは実質的に外国人が占拠していました。中国をスパイするような組織なら、中国の法律の及ばない場所でこっそり活動する方が便利に違いありません。しかし、東亜同文書院は租界には校舎を作っていません。中国の人たちが暮らす場所がありましたし、開校式には中国のお役人が出席したり、卒業生の文集には中国の大統領いわゆる大統領から贈られた揮毫が掲載さ

れたりするなど中国側にも公認されていたのです。こうした中国との協調の上に成り立っていた学校であったということは確認しておきたいと思います。

同文書院の最初の校舎は、高昌廟桂墅里（こうしょうびょう けいしゅり）校舎といえます（図7）。同文書院生は中国語読みして「かおちゃんみやお くいしゅり」のように呼んでいました。これは高昌廟という祠の近くの桂墅里という場所にありました。この地名は今ではなくなっています。1901年に開設されて、1913年まで使われていました。場所は、上海市街地の南、2010年に開催された上海万博の会場近くで、現在は上海交通大学医学院附属第九人民医院となっています（図8）。もともとは中国の女学校として建てられたもので、東亜同文書院はそこを使いました。1913年に中国の内戦に巻き込まれて焼失し、跡地にはキリスト教系のベテル病院が建てられ、その後、今の人民病院になりました。

III 赫司克而路仮校舎

2代目の校舎は、難しい字面ですが、英語の通りの名前である「Haskell」を音訳したもので、日本では普通「ハスケル」と読み、「ハスケル」路仮校舎といっています。仮校舎といっているように、新校舎完成までの仮のものです。1913年から1917年まで設置されていました（図9）。もともとは工場として使われていた建物だそうです。これは上海市街の北、地下鉄四川北路駅の近くです。現在、赫司克而路という通りは中州路という名前に変わっています。当時の建物は何も残っていないですが、路地の形は当時のままで、同文書院の校舎があった場所には「虹徳養老院」と「新宇賓館」という看板が掛かる建物が立っていました（図10）。



図9 大正時代の赫司克而路仮校舎



図10 赫司克而路仮校舎現状 2018年3月筆者撮影)

IV 徐家匯虹橋路校舎

その次の校舎は徐家匯虹橋路（じょかひ こうきょうろ）校舎といえます（図11）。同文書院卒業生は中国語読みで、徐家匯を「しゅーちいあーほおい」、虹橋路を「ほんちゃおるお」といったりもします。ずいぶんと長い名前ですが、上海の徐家匯と呼ばれる地域にある虹橋路という通りにあるということです。これが最も長く使われました。同文書院を紹介する写真は、大体はここを撮影したものです。

最初の高昌廟桂墅里校舎が中国の内戦で焼けてしまったことはさきほどお話ししましたが、そのことに対する中国政府の損害賠償をもとに新築されました。



図 11 大正時代の徐家匯虹橋路校舍正門



図 13 徐家匯虹橋路校舍物産館



図 12 徐家匯虹橋路校舍正門現状 (2018年3月筆者撮影)



図 14 徐家匯虹橋路校舍物産館現状 (2018年3月筆者撮影)

現在はどうなっているかという、これも痕跡は何も残っていません。現在の地図にも虹橋路という名前の通りがありますが、これは戦後に新しく造成されたものです。当時の虹橋路は広元西路と改名されており、この広元西路と樂山路が交差する周辺に同文書院がありました。

そこは普通の住宅地になっています。正門があった辺りから現在の風景を見てみると、上海の庶民が暮らす街並みです(図12)。

ほかにも同文書院物産館(図13)という学内博物館の立派な建物があつた場所も普通のアパートや定食屋になっています(図14)。同文書院の本館があつた辺りに入っていくと、新鮮な野菜や海鮮が並ぶ下町の食料品市場になっていました(図15)。同文書院生の回想を読むと、学生食堂の評判はあまりよくありません。おいしいと書いてい

る人はいないです(図16)。ですから、同じ場所でも、同文書院時代よりも現在の方がおいしいものを食べることができるようです。

この徐家匯虹橋路校舍は上海の中心地からは10kmほど離れた郊外にありました。上海というと、戦前は東洋の魔都と呼ばれたり、現在も中国の経済の中心地として大都市のイメージが強いのと思いますが、徐家匯虹橋路校舍は上海といっても、当時はずいぶん落ち着いた環境にありました。

あまり知られていないようですが、芥川龍之介は、この同文書院に来たことがあります。1921年、同文書院卒業生で新聞記者になっていた人が芥川の中国旅行の案内役となり、母校に連れてきたのです。その時のことが『支那遊記』(改造社、1925年)に書かれています。芥川は同文書院の学生寮の2



図 15 徐家匯虹橋路校舍本館現状 (2018年3月筆者撮影)

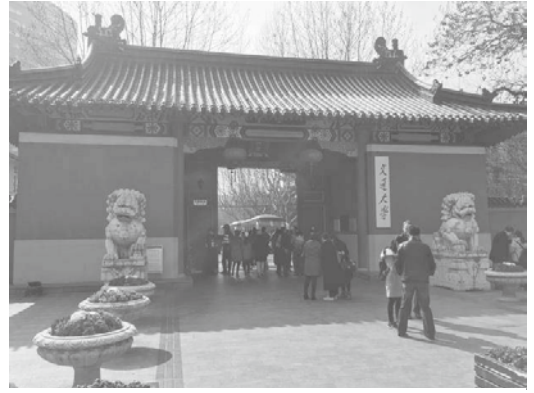


図 17 上海交通大学徐匯校区正門 (2018年3月筆者撮影)



図 16 東亜同文書院学生食堂



図 18 上海交通大学徐匯校区旧図書 (2018年3月筆者撮影)

階の窓から外を眺めるのですが、青々とした小麦の畑が広がっており、ふっと日本にいるかのような錯覚に陥っています。そうしたのんびりした田園風景の中で同文書院生は勉強に励んだのです。上海にあったといっても遊び呆けてるようなところではなくて、やはり集中して勉強するような真面目な施設だったなということが分かります。

V 徐家匯海格路臨時校舍

1937年第二次上海事変の戦禍を被って徐家匯虹橋路校舍は焼失してしまいました。そのため1938年に設置されたのが徐家匯海格路臨時校舍です。1945年、中華民国に接收されるまでありました。これは現在の中華人民共和国国立上海交通大学徐匯校区です。徐家匯虹橋路校舍から北へ1kmほど

のすぐ近くです。もともと、交通大学として作られた施設でしたが、日中戦争で交通大学が中国の奥地へと疎開したので、同文書院が借用させてもらうことになりました。臨時校舍といっているのもそのためです。新しい校舍を建てるまでの期間だけ借りさせてもらおうということです。

ここは中国の名門大学ですので、正門(図17)をはじめ同文書院が使った建物もたくさん残されています。

今は博物館として使われている赤レンガの建物はもともとは図書館でした(図18)。戦前、徐家匯の辺りは田舎で、大きな建物はほとんどなく、徐家匯虹橋路校舍から振り返るとすぐそこに交通大学が見えたました。ほかにも同文書院生も使った学生寮が現在も使われています。布団や洗濯物が干され



図 19 上海交通大学徐匯校区学生寮
(2018年3月筆者撮影)

ており、今も昔も学生は同じように暮らしています(図19)。

交通大学の資料館で、同文書院に関する当時の資料を見せてもらったのですが、その中には小さな優勝カップのようなものがありました。「長崎高等商業学校卓球部 昭和十三年」と彫られています。1937年に徐家匯虹橋路校舎が焼失した際、翌年春まで同文書院は長崎に疎開していましたから、その際、地元の学校の卓球部と交流したのでしょうか。ほかにもノベルティグッズなのか、「同文」という文字が入ったお皿が残されていました。このようなグッズははじめて見ました。そうした同文書院関連に分類されている資料の中には戦後のものも含まれていました。もちろん、同文書院は敗戦によってすでに閉校しています。では、戦後の資料は何かというと、1986年に交通大学を訪問した同文書院第36期卒業生86名の礼状です。彼らは青春をこの校舎で過ごし、戦後、なくなってしまった母校を偲んで、その建物がある交通大学を訪れたのです。礼状を見ると、さすが同文書院生です。全文、中国語で書かれていました。

後、なぜか女優の中野良子さんが1986年にこの大学に来た際のスピーチ原稿のようなものが紛れていました。そこには中国語での自己紹介が書かれていました。ヒロインを演じた高倉健主演の映画『君よ憤怒の

川を渡れ』(松竹、1976年)が文化大革命終結後に中国で大変な人気を集めたことから、彼女は中国でも知られた女優さんなのです。

VI 東亜同文書院ゆかりの地

(1) 徐家匯界限

次に、同文書院ゆかりの場所を見ていきましょう。

同文書院の卒業生の方にお話をうかがったことがあります。文武両道といいましょうか、勉強だけではなく運動も盛んで、1人でいろいろな部活を掛け持ちするのが普通だったそうです。例えば、月曜が柔道だったら、火曜は野球、次は馬術をやって、翌日はラグビーをする。卒業アルバムを見てみると、そうした運動部の練習風景を撮影した写真の中にラグビーのものがあり、よく見てみると同文書院の運動場の背景に二つの尖塔が見えます。これは徐家匯虹橋路校舎の南600mほどのところにある徐家匯天主堂という教会堂です(図20)。現在もその

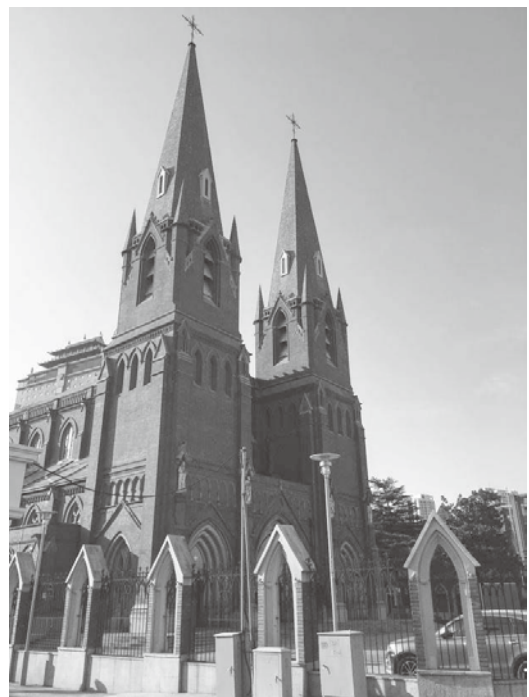


図 20 徐家匯天主堂 (2018年3月筆者撮影)

まま残っています。

交通大学として残っている徐家匯海格路校舍以外は、現在の上海に同文書院を直接俵させるようなものは何も残っていませんから、同文書院に興味を抱かれた方がもし上海に行かれたら、この教会堂を目印にしていれば、その辺りに同文書院があったのだという雰囲気は何となくわかると思います。

同文書院が毎年遠足で必ず行っていた場所があります。徐家匯虹橋路校舍から南へ4 kmほど行ったところにある龍華です。ここは梅の名所だそうです。今回、ちょうど梅の時期で大変に賑わっていましたが、同文書院生もこうした光景を見ていたはずです。

(2) 虹口界限

上海に住む日本人は中心地の北にある虹口(こうこう)という地域に集中していました。徐家匯の同文書院からは路面電車を乗り継いだりしても1時間以上かかったようですが、休日には学生がよく遊びに行っていました。この地域で特に有名なのが内山書店です(図21)。日本人のキリスト教信者内山完造が妻・美喜子と営んでいた書店です。ただの書店というだけではなく、上海の文化人が集うサロンのような場所にもなっていました。同文書院との関係でいえば、同文書



図 21 内山書店現状 (2018年3月筆者撮影)

院第15期生で卒業後は母校の教員になった鈴木擇郎先生、戦後は愛知大学の教授として『中日大辞典』初版(中日大辞典刊行会、1968年)を完成された先生ですが、この方が内山書店に行ったら魯迅がいたので、同文書院で授業をして下さいと頼んだところ、実際に魯迅は同文書院にやって来て特別授業をしてくれています。魯迅も認めているくらいですから、やはりこの学校は日本と中国をつなぐような存在として中国側にも認知されていてといえますね。そういえば同文書院を出て、内山書店に就職した者もいます。

日本人街だった虹口には、日本人と関係の深い建物がまだたくさん残っています。内山書店も建物がそのまま残っています。1階には新華書店と中国工商银行が入っていました。このすぐ近くには、上海海軍特別陸戦隊の本部だった建物も残っています(図22)。いろいろなテナントが入り、上の階には人が住んでいるようでしたから雑居ビルとして使われているようです。ほかにも西本願寺別院はまだ残っていました(図23)。

そうした中で最後の紹介したいのが、蘆澤印刷所です。印刷会社と同文書院にどのような関係があるのかといえば、同文書院は中国を専門とする学校でしたから、当然、中国語教育が盛んでした。例えば、さきほど



図 22 上海海軍特別陸戦隊本部現状 (2018年3月筆者撮影)



図 23 西本願寺別院現状 (2018年3月筆者撮影)

出てきた愛知大学の『中日大辞典』というのは、もともと、同文書院が上海で作っていたのですが、戦争で中断されてしまい、戦後、それを愛知大学が引き継いで完成させたものです。そういった中国語に関わる活動には、同文書院専用の独自の中国語教材を作るというものがありませんでした。その代表的なものが会話教科書の『華語萃編』(かごすいへん)というもので、学年ごとに1冊ずつ、4冊が作られ、さらに言葉の変化に対応して何回も改訂していました。そうした独自教材を印刷、製本していたのが蘆澤印刷所です。教材を作っていたわけですから、同文書院の教育を支えていたともいえます。今回、その場所を訪ねてみると、住所や地図と照らし合わせると、どうもそれらしき古い建物がありました(図24)。日本人が作った建



図 23 蘆澤印刷所現状① (2018年3月筆者撮影)



図 25 蘆澤印刷所現状② (2018年3月筆者撮影)

物というのは割とすぐに分かります。なぜかといえば、天井が低いのです。欧米系や中国系の建物の1階分の高さに2階分くらい詰め込んでいるような感じです。印刷所だった建物の通りに面した1階には庶民的な服屋などが入っていました。何か痕跡がないものかと思い、辺りを歩くと、裏手に日蓮宗の本圀寺だった建物があり、そこから蘆澤印刷所の敷地だった場所へ入れそうだったので、中へと進んでみました(図25)。そこは洗濯物がぶら下がっている庶民の生活空間で、腰掛けたおばさんが白人モデルが写っているようなファッション雑誌を読んでいた。

「すみません、ちょっといいですか。昔、ここに日本人の印刷所があったそうなのですが、知っていますか」

と、彼女に尋ねてみました。

「そうですね。このあたりにはたくさん日本人が住んでいて、ここには日本人の印刷所がありましたよ。けれども、今は改装してたくさん人が住んでいるんですよ」

「どうして、昔のことを知っているのですか」

「私はずっとここで暮らしているから、そういう風に聞いているのですよ」

彼女は戦前のことを体験しているような年齢ではありません。そんな方でも日本人

がいた頃の事を伝え知っており、歴史というのはつながっているものだと感心しました。

おわりに



図 24 根津一院長と中国人ボーイ 2 名

最後に 1 枚の写真を見ていただきたいと思います(図 26)。これは東亜同文書院の徐家匯虹橋路校舎で撮影されたものです。帽子を被った洋装の人物が同文書院を作り、20 年以上にわたって院長を務めた根津一先生です。見ての通り、もうおじいちゃんです。先生は 1923 年に引退していますから、その直前の写真だと思われます。ほかに 2 人の男性が写っていますが、中国服を着ていますから、中国人ということがわかります。ここでは、中国人のボーイさんが根津先生を支え、さらにもう 1 人が心配そうに後ろから近づいてきています。私は同文書院が目指したのは最終的にはこういうことだったのではないかと思います。日本人と中国人が手を携えて仲良くして暮らしましょう、と。根津先生はそれを夢見て学校を作り、少なくとも身の回りでは、この写真のように、思いを実現させていたわけです。もちろん、その後、戦争によって、そういった思いも、同文書院もすべてが打ち砕かれ

ていくこととなりますが、戦前ある時点においては、このように、日中交流が同文書院の中では完成していたのではないのでしょうか。そういった活動の末流に、愛知大学はあるわけです。

では、そろそろ時間になりましたので、以上で終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

質疑応答

質問: 東亜同文書院の新生は、どうやって上海に行ったのですか。

石田: 東亜同文書院の学生は、各府県で選考された公費生を中心に私費生や満鉄などからの企業派遣生もいましたが、入学する際には必ず東京に全員が集合していました。東京で入学式を行い、宮城、今の皇居を見学させていただき、その後は鉄道で名古屋、京都、大阪と移動しながら、伊勢神宮参拝や京都御所、二条城、大阪城を見学したり、有名な工場などの社会見学をしたりしました。入学してすぐに国内の名所旧跡を巡る修学旅行をする感じです。その後、神戸で乗船し、長崎を経て上海の本校へ入るのです。海外のことを学ぶ前に、まず日本のことをよく知ろうという、なかなかすぐれた入学行事を毎年行っていました。

質問: 愛知大学同窓会岡山支部の有森茂生と申します。国立国会図書館で荒尾精について検索して見ましたら、明治 22 年 10 月、石川県で行った講演の記録を見つけました¹。その中で面白いのは、日本と清国との貿易をする日清貿易商会の従業員が 100 人を超えたら、亜細亜貿易商會に改組してインドやアフリカ、南洋諸島にも進出するつもりであるといっていることです。ずいぶんと大風呂敷を広げるものだったのです

¹ 荒尾精『日清貿易商會荒尾精演説筆記』石川県第一部、1889 年。

が、こうしたことが窺える荒尾精さんの動きは何かありますか。

石田：さきほどの発表の中で紹介した日清貿易研究所といのは、今のお話に出てきた日清商会という貿易会社の社内教育部門として構想されて開校しました。荒尾は、日清貿易商会という商社を作りたいかったのですが、その頃の日本には清国との貿易業務をこなせるような人材がまったくおらず、社員の養成から始めたわけです。ただ、本体となるはずだった日清貿易商会は実現していません。資金難や日清戦争がありましたし、日清戦争直後に荒尾が急死してしまったからです。

しかし、今、有森様ご紹介くださった中国以外にも進出しようというのは、荒尾の持論でした。荒尾のお弟子さんに井上雅二という人がいるのですが、この人は東南アジア開拓の会社を起こしたり、ブラジル移

民を推進したりとしています。そうした活動には師である荒尾精の影響があったようです。ですから、大風呂敷といえばそうなのですが、荒尾は真剣にそう考えていたのだと思います。



図 25 上海に残る東亜同文書院ゆかりの地 (google map)